

2026年度 入学試験問題
(札幌・東京・東海・仙台・高松会場)

国 語

(6 0 分)

〔 注 意 〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

一 次の記事を読んで後の問に答えよ。

①信頼について考えるとき、赤の他人や、せいぜい顔見知りの人との関わりに焦点を当てがちである。わたしたちは互いをどう判断しているのだろうか？わたしたちは互いをどう判断するべきなのだろうか？わたしたちは互いを判断する必要があるのだろうか？しかし、信頼や不信に関する多くの問題は、家族、友人、恋人、同僚、隣人などの人間関係の中で生じる。親密さが増すと、すべきことはどう変わるのだろうか？また、個人的な配慮と厳然たる事実はどのように天秤（てんびん）にかけられるのだろうか？

②親しい人間関係においては、明らかな反証がない限り、疑わしきは罰せずという態度で、友人はわたしたちに誠実であると思い込んだり、そう思い込む義務を感じたりもする。これは友情そのものが信頼すべき理由だからだろうか？そうかもしれない。しかし、よく知っている人についての多くの肯定的証拠を積み重ねてきたことも確かである。万引きの嫌疑をかけられたとしても友人を信頼するべきなのは、あなたがその友人を何年も前から知っているからであり、それゆえ、その友人が嫌疑をかけられているようなことはしていないというきわめて確かな証拠をもっているからである。しかし、この証拠がすべてだろうか？友人や家族を信頼するかどうかを決める際に、確率を計算し始めると、彼らはわたしたちを恨むかもしれない。

③哲学者のサラ・ストラウドとサイモン・ケラーは、友人について自分が抱いているイメージに肯定的な意味でコミットすることが友情の一部だと主張する。つまり、他人に対して友人を「ヨウゴ」し、友人についての悪意あるゴシップを信じることに抵抗して、友人がよい動機（たとえそれがどんなものなのか、まったく分からない場合であっても）から行動していると想定すること、である。もちろん限界はある。しかし、こうした限界に挑戦することは、自分にとっても友人にとっても苦痛となる可能性がある。証拠を目のあたりにして最悪の想定が真実である可能性を認めざるを得ないのはいつなのか？——犯罪者の母親や妻がその犯罪者を「ヨウゴ」しているところを見ると同情したくなるだろうが、そのことを不合理だと非難することは難しい。合理性は人間関係を無視することを求めないのだ。

④信頼性を「コウチク」する一つの仕方として考えられるのは、その人を信頼することである——いづれにせよ嘘（うそ）をつくものと思われることが分かっていると、人は本当のことを話す気にはならないものだ——。おそらく、わたしたちには愛する人がこのような仕方
で信頼に値する人になるように、手助けをする特別な義務がある。責任やケアといった他の人間関係においても同様のことが義務となる。教えることは「A」に信頼することの延長にある。知識という点と知的に開かれているという点の双方において信頼がもたらすこのような意図的な効果の一部は、学生の信頼性を高めることがある。

⑤しかし、こうした² 個人的な考慮には負の側面もある。疑わしきは罰せずという、親しい友人に対して抱く態度をどの程度まで広げることができるだろうか？一緒に育った人だけを信頼して、それ以外の人は信頼しないとしたらどうなるだろうか？一九六〇年代にジャック・ワインバーグがバークリーで学生活動家たちに言ったように、三十歳以上を信頼しないとしたらどうなるだろうか？狡猾な東洋人に対する好ましくない偏見のためにわたしが日本人を信頼しないとしたらどうなるだろうか？

⑥信頼について正しく理解することは——信頼する側としてのわたしたちにとって、積極的な協力関係を活用し、だまされることを避けられるようになるという点で——よいことである。しかし、こうしたことは、信頼を受け取る側、つまり、信頼される側（あるいは、不運な場合には不信を抱かれる側）にとっても重要である。友人と接するとき、わたしたちは友情を天秤にかけると、不信ではなく信頼に傾くかもしれない。しかし、だからといって、その人を信頼する証拠が不足しているからといって、あまり快くない個人的な感情を利用して、その人を信頼することを拒否することは許されるものではない。

⑦多民族社会に住む人たちは一般的な信頼レベルが低いことを示す、議論を呼ぶ研究がある。しかし、実際に隣人と交流して、ある人種集団の^ウ トクメイの一員ではなく個人として関わることで、信頼のレベルは高まっていく。とはいえ、こうした研究は解釈が難しい。なぜなら、多民族が住まう一つの地域は経済的には恵まれておらず、そのため、犯罪や無秩序やはかなさを^エ B に経験するため、信頼レベルの低い環境となることが多いからだ。こうした状況下では、^エ ハラうことはきわめて C であり、不可欠ですらあるのだ。

⑧わたしたちはみな、たとえ意識していなくとも、そして、たとえ性差別的あるいは人種差別的態度を意識して拒否しているとしても、バイアスをもちやすい。ハーヴァード大学のプロジェクト・インプリシットは四五〇万回以上のテストを実施しているが、それぞれのテストでは、たとえば、黒人の顔か白人の顔かで、ネガティブなイメージとポジティブなイメージに関連性があるかを調査することを目的としている。他にも、若者の顔か老人の顔か・痩せているか太っているか・男性か女性か、などが対比されている。実験対象者は何度も、黒人の顔をすぐにネガティブなイメージに結びつけ、白人の顔をポジティブなイメージに結びつけてしまう。

D なのは、この結果は、テストを受ける黒人であっても、民族を問わずこうした結びつきを心から否定している人にさえも当てはまる。もし自分は例外だと思ふのなら、プロジェクト・インプリシットのウェブサイトで試してみることをお勧めする。

⑨³ 残念ながら、善意だけでは十分ではない。バイアスが起る可能性に集中して、偏見をもつてはいけなくと自分に厳しく言い聞かせることさえ、逆効果になる可能性がある。おそらく、それは精神的努力によってこの点に集中しすぎてしまうと、いったん警戒心が解かれたときにはステレオタイプに抵抗することがかえって難しくなってしまうからだろう。しかし、もっと E なのは、ス

イ ビッグデータを活用した確率による合理性は、効率を重視した現代の人間関係と相反するものではないということ。
ウ 長い付き合いの中で共に過ごした時間は、相手の行動を信用するための合理的な理由に十分なり得るということ。
エ 社会科学の発展により人間関係の構造が解明され、自然科学に基づく合理的な判断との相違はほばないということ。
オ 社会活動の成立を最優先で考える人間にとって、科学的な合理性よりも相手との人間関係が重視されるということ。

問五

傍線部2「個人的な考慮には負の側面もある」とあるが、筆者がこう考えているのはなぜか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 友人であれば、信じなければならないという義務が生じ、心理的な負担が大きくなるから。
イ 相手との力関係によつては、不信を抱く相手に対しても信頼を強いられることがあるから。
ウ 高度な情報化社会では個人の情報だけで相手の意図を判断することは難しくなっているから。
エ 個人の性格に基づく配慮によつては、相手が嘘や不正を働くことを助長する恐れがあるから。
オ 個人的な感情だけで相手を信用するかどうかを判断すると誤った結果を招く可能性もあるから。

問六

傍線部3「残念ながら、善意だけでは十分ではない」とあるが、筆者はなぜ「十分でない」と考えているのか。六十字以内で説明せよ。

問七

筆者は、他者との「信頼」関係はどのようにして築かれるものだと考えているか。本文全体を踏まえて、七十字以内で説明せよ。

問八

本文の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 形式段落①では信頼についての一般論への疑問が提示され、形式段落②③では、こうした一般論への反論が明らかにされている。

イ 形式段落④でいくつかの例を用いながら、信頼関係を結ぶために特別な努力をしなければならない場合もあるのだと述べている。

ウ 形式段落⑤では相手を信頼することの危険性現状が示され、続く⑥段落で予防策としてどのような方法があるかを具体的に考察している。

エ 形式段落⑧で筆者が大学の研究を取り上げたのは、形式段落⑦で述べた主張を補強することで、自説に説得力をもたせるためである。

オ 形式段落⑨では多くの人々から信頼を得ることの難しさを述べた上で、グローバル社会における我々のありかたに指針を示そうとしている。

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

「俺」(たつくん)は高校時代、部活の「興枘先輩」(ペンネーム・ムシグルマ)と「言えなかったこと」というテーマでそれぞれ小説を書いた。大学生になった「俺」は小説サークルのイベントで「興枘先輩」と再会した。

先輩はポケットに手をつ突っ込んで、A。

「書くの、やめるんだ」

「……やめる?」

「うん」

「書くのを? え、誰が?」

「わたしが」

「書くのって、小説を、書くの?」

「そう。わたし、小説を書くの、やめる」

わたし、小説書くの、やめる。脳内で繰り返して、唾を呑み込む。「どうして」

「思いの外、びっくりしてくれるね」

「だって、いや、……読んで、ました。ムシグルマの、小説。更新されたら、その都度。だから」

「そうなんだ?」先輩はB。「読んでくれてる人がいたんだ」そうだ。気まぐれにHPを覗いて、更新されていたら、読んでいた。感想を書いたことも、作者にメッセージを送ったことも、『灰Hi杯』の運営にコメントを投稿したこともないけど、読んでいた。

「そっかあ、知らなかったな。ありがたい。有終の美というやつかな」

「続けてくださいよ」

「いやあ、かなり満足しちゃったんだよね。目標も特にないし、来年から社会人で忙しくなるし、書く理由もないし、他にやりたいことあるし」

C。やめろ。

「そんなの、アンソロジー出して、ネットに公開して、それで、」俺は立ち上がり、読んでいた『灰H杯』の冊子を掴んだ。「こんな立派な本、買ってくれる人も、だって、なんでも理由になりますよ。存在しているだけでいいんです。存在しているだけで」

先輩は瞬いた。その口元が緩んだ。「甘美な口説き文句。君はやっぱり、すごいな。じゃあ、たっくんはさ、どうして筆を折ったの？どうして小説を消しちゃったの？」

俺は口を噤む。あなたがいるから自分が霞んで、とは、言えない。「俺は、だから、ただ、もう、いいかな、って」「じゃあ、わたしと同じだね」

そうだ、これは願望の押し付けだ。輝いている先輩を見ていたい、という、エゴ。自分が舞台から下りた理由が消える様を、見たくない。

自分が舞台を下りた理由が欲しい。

「高校生のときのわたしって、言語化が下手で。当時は全然気にしてなかったんだけど、君の一小説とアカウントが消えたとき、心底後悔した。もつとちゃんと伝えておけば良かった。素敵な小説だね、この台詞が好きだよ、このシーンが良かったよ、って、拙くてもいいから、感想をぶつけておけば良かった。正面から堂々と。共通テーマの短編を読んだときも、何も言えなかった。いや、たぶん、言わなかった」

先輩は、C。

「あの短編を読ませてもらったとき、感動したんだ。憧れた。ああいうふうには、わたしには書けないから。趣味で楽しくやってたつもりなのに、悔しくなった。たっくんの短編には敵わない、わたしのは拙いな、って」

俺は何も言えない。

「あのとき、言わなくてごめんね。いまでもごめん。これはとても自分勝手な吐露だって、わかってる。でも、わたしは君の小説が好きだった。好きだったんだよ、たっくん。大切にしていってほしかった。やめないでほしかった。無くさないでほしかった」¹最愛の人の墓前に立って、いつまでも色褪せない思い出を反芻し、語り掛けるときのような笑みだ。未練の欠片もない。揺るぎはしないのだと俺は悟った。嫌だ。

同じ感情だ。俺が先輩に書き続けてほしいのは、それと同じ。

「小説、どこか、賞に応募したり、してくださいよ。きっと本で食っていけますって」

E。「プロになりたいわけじゃないんだ。大層な目的も目標もない、ただの趣味だったけど、たくさん作品に出会っ

て、たくさんの書き手と話して、たくさん感じたことを伝えた。良い小説も書けたし、最高だったよ。ほんと、大満足」
こんなの、バンドの解散コメントだ。「負けないでくださいよ」

「わたしは何とも戦ってないよ」

先輩は腕時計を見遣^みって、「飛行機だから」と言った。弾むような口調だった。

俺は尋ねる。「二度と、書かないんですか」

「書かない」

「奇跡が起きても？」

「うん」

先輩は、間を空けた。

「奇跡か」

俺を見ている。長い前髪に隠れていたときとは違う、黒色の水晶体がふたつ、情けない顔の俺を映している。

「再会するのは、ひとつの奇跡だね。ここでたつくと会えて、USBを渡したのは、間違いなく奇跡だ。大団^Y円。楽しかった。
じゃあね」

手が振られた。俺は振り返せなかった。²しばらく、遠ざかっていく先輩の背中を見つめていた。彼女の背中では人混みのなかでちらと現れたり隠れたりして、どんどん小さくなって、やがて見えなくなった。

テーブルに両手をつく。視線がどんどん下がっていく。先輩の言葉が俺を取り囲んで、ぐるぐる回っている。かごめかごめ。

【中略】

しばらく車窓をぼんやりと眺めていた。

バッグからノートパソコンを取り出して、膝の上に置いた。

電源を入れる。

ポケットからUSBを出す。

キャップを外して、挿し込む。

テキストデータがひとつだけ表示された。データ更新日は昨日だ。題名は「言わなかったこと」。
カーソルを重ね、クリックして開く。一行目を読んだ瞬間、衝撃が走った。
違う。

ページ数を確認する。短編にしては長い。文字数もかなりある。スクロールしてみれば、改ページがやけに多い。頭に戻り、息を呑んで読み進めた。ああ、これは。

これは、あの短編じゃない。

感想だ。

俺がネットに載せていた、完結した長編、稚拙だった短編、中途半端な大長編、そして、言えなかったことの短編、全作品の感想が書いてある。お気に入りの台詞や地の文の引用、キャラクター像の深読み、設定の考察、読みながら思い出したこと、感じたこと、考えたこと、文章の些細な遊びやメタファーへの言及まで、まごうことなき絶賛の羅列。

記憶を揺り動かされ、ただただ、読み進める。

同じ文章を何度も読み返し、「おい」

左肩を叩かれた。グーテが不機嫌な顔で俺を見ていた。

「次、下んで」

「あ」

「これから集中過多のやつはうわ顔あつか！なんや熱か！」

「うるさいうるさい」俺は慌ててノートパソコンを閉じ、開いてUSBの取り外しを行い、また閉じる。

電車が停まってドアが開き、俺たちはホームに下り立った。改札を抜け、駅を出て、ロータリーの端で立ち止まった。簡単な挨拶をしてお開きになる。先輩たちは語り足りないのか飲みに行くようで、連れだつて繁華街に消えていく。「ほな」「じゃあ」「はよ寝えや」「風邪じゃない」「じゃあなんやねんやつば好きやったんか」「うるさい」とグーテと別れ、俺はバス停へ向かう。

秋の肌寒い空気が、顔と頭を冷やしていく。

ベンチに座り、背凭れに体重を預け、夜を照らす駅の明かりを眺めた。ゆっくりと、息を吐いた。

パソコンを取り出して膝に載せ、USBを挿し、画面に表示されたデータを見つめる。

言わなかったこと。

顔を両手で覆い、仰ぐ。

どうして。

どうしてこんな、惨いことを。

先輩の小説は凄まじい。調子に乗った物書きの筆を折らせた。そんな人が、俺の小説を褒めている。アカウント削除と同時に藻屑^{Zもくし}となって消えた、俺の小説を。

馬鹿みたいじゃないか。

俺が書き続けるべきなら、先輩だって。作家にならないとしても、人生の宿題として、執筆を続けるべきだ。俺なんかに懂れていないで、自分のために書くべきだ。書く理由なんていくらでも作ればいい。先輩の小説は、先輩にしか書けないんだから。固まった。視界が歪んだ。泣くなや、と聞こえた。

それは、俺が、言われたかった言葉だ。

俺が書けなくなったことを、俺のせいにしたくなかった。先輩は俺を圧倒した。俺はそれを理由にした。先輩を理由に筆を折った。続けることができなかった。いや、グーテの言葉を借りるなら、できなかった、は言い訳だ。しなかったのだ。涙をすすって、USBを取り外した。ポケットに仕舞う。大事に仕舞う。

バスが来た。停車して、ドアが開く。俺はパソコンを畳んでバッグに入れ、荷物を持って立ち上がり、乗り込む。生暖かい車内。ひとり掛けのシートに座り、荷物を足の下へ入れる。発車まで、まだ時間はある。

言わなかったこと。

俺も言わなかった。共通テーマの短編に打ちのめされました。ムシグルマの小説がいちばん好きです。どれも伝えなかった。伝えたら書き続けてくれた？わからない。ただ、言わなかった。言えなかったのではなく、言わないことを、俺が選んだのだ。書かない理由に絶つて、白紙のテキストデータの前で固まって、一文字も打たないまま保存せず終了してきた。

定刻になって、ドアが閉まり、バスが発車する。景色が後ろへ流れていく。驚くほど優しく微笑む先輩を、丁寧に思い出す。「無くさないでほしかった」。

まだ取り返しがつくだろうか。失ったものを取り戻せるだろうか。先輩の好きだったものを。無理だ。俺の小説は全部消えた。俺が消した。

バッグからパソコンを取り出す。スリープを解除して、テキストファイルを作成する。この真っ白の画面に、一から構築するしかない。

い。失い、挫け、ぐらつき、迷い、悩みながらも。だから先輩。興梠先輩。俺が小説を書いたら、また出会えますか。

また読んでくれますか。短編をどこかに載せたら、長編を更新したら、書籍を刊行したら、今度は感想を送ってくれますか。言わなかったことを伝え合って、笑い合えますか。また好きになって、懂れてくれますか。また小説を書いてくれますか。

応えはない。揺れる車内で、俺はキーボードを打つ。

【注釈】

(注1) メタファー … 隠喩のこと。

(注2) グーテ … 「俺」の大学の文芸サークルの友人。

(鯨井あめ『O こと』による)

問一 二重傍線部X「甘美」Y「大団円」Z「藻屑となって」の本文中の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

X「甘美」

ア 聞き心地の良い

イ 甘ったるい

ウ 非の打ち所がない

Y「大団円」

エ 不釣り合いな

オ 感情が伴わない

Z「藻屑となって」

ア 周囲と協力して勝つこと

イ 幸せな結末でおわること

ウ 納得して終わること

エ 多くの友人ができること

オ 悲劇的な最期さいごを迎えること

ア もやがかって

イ 絡まりついて

ウ 跡形もなくなって

エ 否定されて

オ 脳内に広がって

問二

空欄

A

く

E

に当てはまる文として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 朗らかな笑みだ。

イ 眩しそうに目を細めた。

ウ 驚くほど優しく微笑んでいた。

エ 真つすぐ俺を見据えた。

オ 虚を突かれた表情だった。

問三 傍線部1「最愛の人の墓前に立って、いつまでも色褪せない思い出を反芻し、語り掛けるときのような笑みだ」とあるが「俺」

は先輩の笑みをどのように理解したのか。傍線部の表現を踏まえて七十字以内で説明せよ。

問四 傍線部2「俺は振り返せなかった」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 先輩の書く小説への愛情を伝えたものの今更言われても仕方がないと軽くあしらわれたことに無力さを感じ、後悔している。

イ 執筆をやめた自分が執筆を続けてほしいと頼むことは説得力があると気づき、本気で止めておけばよかったと後悔している。

ウ 自分が手を振り返すことで先輩との再会を終わらせてしまおうと思うと寂しくなり、もつと話しておけばよかったと後悔している。

エ 執筆活動が続けてきた自分にとって先輩が小説を書くことをやめると宣言したことは自分への裏切りだと感じ、ぼうぜん 呆然としてい

る。
オ 先輩の小説に対しての正直な感想を伝えないまま先輩から一方的に執筆活動をやめると告げられ何も言えず呆然としている。

問五 空欄 ○ に本文中の最も適当な言葉を十字以内で抜き出し、本文のタイトルを完成させよ。

問題は次のページに続きます。

三

次の文章は、中納言が、中の君（姫君）のもとを、素性を隠して訪れる場面である。実はこの時、中納言は、相手を中の君だと知らず、身分の低い但馬守の娘だと勘違いして訪れている。次の文章を読んで後の問いに答えよ。問題の都合上、一部変更した部分がある。

契りやありけむ、今宵は ¹過すべうもあらねば、やをら立ち出でたまひて、行頼に、

（中納言）「この竹のなかに隠れて」

と言ひて、^I 歸り入りて見たまへば、^対和琴の人は入りにけり。琵琶、^中箏の人は物語忍びやかにしつつながむめり。人は池のわたりなど涼み歩くなるべし、そなたに声などあまたして、いと静やかなるに、

（中納言）「ゆくりなく ² あはつけき振舞は、おのづから軽々しきことも出で来るを」

と、^普あがたくおぼしをさめたる心なれど、我ながらあやしく鎮めがたきを、^身人の程をこよなき劣りと思ふに、³ あなづらはしく、

（中納言）「今宵を過してまた言ひ寄らむ風の便も、さすがにあるべきやうもなし」

とおぼし寄りて、月影のかたに寄りて、⁴ やをら入りたまひにけり。

^ひ人氣におどろきて見返りたるほどに、やがて紛れて、（中納言は）姫君を奥のかたに引き入れたてまつる。人心地おぼえず、むくつくく恐ろしきに、^{II} ものもおぼえず。奥のかたより、和琴の人の声にや、

（対の君）「^ち御殿籠れ。御格子も、更けぬらむ、人々参りたまへや」

と言ひて、おざり入るに、かかれば、言はむかたなく、⁵ 思ひまどふなども世のつねなりや。かたみに聞きかはして心かはしたらむにてだに、^突然の男の訪れの驚きは、^並々ではな^い。ま^して今の^場合、^中の君や^対の君の^心中^はは、⁶ まいて心のうちともはいかがありけむ。脱ぎやられたる直衣、指貫の手あたり、にほひは、えもいはずあてなる気色しるけれど、⁶ 心の慰むべきかたなく、

（対の君）「殿の、^私をまことに信頼のおける者と、^中の君をお手もとから離してこちらにお移りになったのに、^かかかる事の聞えてもあらば、いみじくもあるべき

かな。この御身も、今はいたづらになりたまひぬるにこそ ^{あめれ}」

と思ひつづくるに、あたらしう、口惜しく、涙におもほれまどひながらも、思ひやりいと静かなる人にて、

(対の君)「言ふかひなきことを言ひののしりて、あまねく人の知らむはいみじかるべし。広く人々を知つてしまつてはいよいよまずいことになるだろう後の隠れなくとも、この際はなほ忍びてやみなむ」

と思ふ心にて、御几帳どもをさしちがへて、

(対の君)「御前に恥ぢきこえたまふ人々は、暑暑いきに、さしのきてを」

と、⁷さりげなく言ひなして、胸は騒さわぎながら、^{III}つゆもまどろまず。

中納言は、

「うはべこそ限りなく美しくても、よそ目こそ限りなく美しくてもすこし近劣りすることや」

とおぼしつるに、恐ろしくいみじと、おぢわななきて、消え入るやうに、泣き沈みたる氣配、手あたり、類なしと見ゆるよその月影

よりも近まさりして、あえかにらうたげなるに、いよいよあはれにて、らうたくおぼすに、程なく明けぬべき夜も口惜しく、おぼし乱

るるに、鶏もしばしば音なふに、いも寝ず焦られ居たる人の、誰男が誰とさえわかないとだに知らぬ嘆かしさをいみじく言ひ思ひたるに、

(中納言)「げにことわりなれど、直々並々の身分の者たちにしきあたりに我まだきに知られじ。見では片時あるべくもあらぬを、おのづから我がため世の音

聞見苦しくもときなかるべきさまにてこそ」

と、堪へぬ心を鎮めて、⁸名のりもしたまはず。みづからばかりには、立ち別るべき心地もせぬままに、

(中納言)「さるべきにや、限りなき心のとどめがたくなりたるも、浅からぬ契りの程とおぼし慰めて。ただ今は、

いかにもいかに同じ心におほしなりね」

と⁹宮の中将と思はせて、いとかき混ぜなる言葉に語らひ慰むるを、聞き入るべくもあらず、絶え入りぬばかりなる氣色を、心苦し

く、わりなくこしらへわびたまふに、とりもあへず天の戸あくる氣色なるに、昼さへかくてあるべきならねば、¹⁰後瀬の山を頼めおき

て、霧深くたちこめたる有明の月に紛れて、立ちでたまふ。

〔夜の寢覺〕による

問一 □で囲った「あめれ」について、次の説明の空欄を埋めよ。

「あめれ」は、本来は「あ 《 》めれ」と読まねばならないが、「あるめり」の「る」の「撥音便」になった一字が表記されていないため、「あめれ」となっている。

問二 傍線部1～3の現代語訳として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

1 「過すべうもあらねば」

- ア どのようにすることもできないなら
- イ もしもの時よい方法がないのならば
- ウ むなく過すこともできないので
- エ 手段や方法は何か考えられるので

2 「あはつけき振舞」

- ア 注意ぶかい行動
- イ 思慮のある態度
- ウ 落ち着いた様子
- エ 軽はずみな行動

3 「あなづらはしく」

- ア 見下すような気持ちで
- イ 慈しみ愛しい気持ちで
- ウ 腹立たしく感じながら
- エ とまどいを感じながら

問三 二重傍線部Ⅰ「帰り入りて見たまへば」、二重傍線部Ⅱ「ものもおぼえず」、二重傍線部Ⅲ「つゆもまどろまず」、二重傍線部Ⅳ

「泣き沈みたる」の主体（主語）は誰か。次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。同じ記号を複数回使ってもよい。

ア 中納言 イ 行頼 ウ 中の君 エ ほかの女房たち オ 対の君

問四 傍線部4「やをら入りたまひにけり」とあるが、中納言は普段、自制心が強い人物であると本文にあるが、なぜこの時はそれを

抑えきれず、中の君に強引に近づいたのか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 普段はとても冷静な中納言だが、但馬守の娘（中の君）の美しさに心を奪われ理性よりも本能に従ってしまったから。

イ 今夜を逃してしまふと、もう二度と但馬守の娘（中の君）に会えなくなるかもしれないと焦り、行動を起こしたから。

ウ 但馬守の娘（中の君）ならばと身分を見くびり、今夜というまたとない機会を逃すまいと考え軽率な行動に出たから。

エ もたらす結果に不安を感じながらも、どうしても但馬守の娘（中の君）のいる場をはなれることができなかったから。

問五 傍線部5「思ひまどふなども世のつねなりや」の解釈として正しいものは次のどれか、最も適切なものを次の中から選び、記号

で答えよ。

ア 中の君は、中納言が突然部屋に入ってきたことに対して、迷い悩んでいるが、そのようなことは世間によくあることだ。

イ 中の君は、突然部屋に入ってきた中納言に対して、喜びのあまり天にもものぼる気持ちになったことは当たり前のことだ。

ウ 対の君は、中の君一人がいるはずの部屋に入ると中納言まで中にいたので、狼狽するなどというところの騒ぎではない。

エ 対の君は、中の君と中納言が仲睦まじく部屋の中にいたのではっきりとして気が抜けてしまうというところの騒ぎではない。

問六 傍線部6「心の慰むべきかたなく」とある。ここでの対の君の心の動きを説明した次の文章にあうように、五字程度で答えよ。

中納言の脱いだ直衣や指貫の手触りや薫りから、中納言が《 五字程度 》であろうということが、対の君にはつき

りと感じられたが、だからといって心の慰めようはないということ。

問七 傍線部7「さりげなく言ひなして」とあるが、中納言と中の君の契りを知った対の君は、何気なく言いつくろつてどのようなに

ように思ったか。次の文章にあう内容の古文を本文中から十三字（古文で）で抜き出せ。（句読点は一字に数えない）

「中の君の将来を案じ、騒ぎ立てて皆に知られる事態はあつてはならないと判断し、《 十三字古文で 》と思った。

問八

傍線部8「名のりもしたまはず」や、傍線部9「宮の中将と思はせて」などから、中納言は、自分の名を明かさず、宮の中将であると中の君に思わせているが、なぜ素性を隠したのか、八十字以内で説明せよ。その際、採点に文字数は関係ないものとする。優れたものであれば、十字であつてもこの設問の満点を付す。

問九

傍線部10「後瀬の山を頼めおきて」とあるが、どのようなことを約束したと考えられるか、次の文章に合うように、五字程度で答えよ。

中納言は、中の君に《 五字程度 》と約束しと考えられる。

問十

本文の流れを要約した次の五つの出来事を、本文に書かれている順に沿って並べ替えるとどれになるか。最も適当なものを後ろのA～Eから選び、記号で答えよ。

- A 突然の訪れに驚く中の君を奥へ引き入れて、恐れおののく中の君をよそに、中納言は契りを結ぼうとする。
B 夜が明ける気配がして中納言は、中の君と後のことを約束し深く立ち込める霧に紛れてその場を立ち去る。
C 姫君だと知らない中納言は、普段の自制心が効かないで、この機会をのがすまいと強引な行動を決意する。
D 怯え泣き沈む中の君の様子に、中納言はますます心を惹かるが、この後のことを考慮し名前を明かさない。
E 対の君が、この出来事が殿の信頼を裏切り、中の君の将来を台無しにすると案じ、隠し通そうと決意する。

- ア C ↓ A ↓ E ↓ D ↓ B
イ B ↓ C ↓ A ↓ D ↓ E
ウ E ↓ B ↓ D ↓ A ↓ C
エ C ↓ B ↓ A ↓ D ↓ E

問十一 この文章の主題として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 前世からの因縁という偶然的な出会いによって、互いの容貌を知らない男女が結びつく。
- イ 普段冷静な中納言が、恋心から理性を失ってしまい、軽率で身勝手な振る舞いを重ねる。
- ウ 中納言と中の君、双方がお互いの身分を誤認したまま、一方的な男の行動で恋が始まる。
- エ 高貴な中納言が、身分の低い娘を見下し、その自己中心的な行動が後の悲劇の元となる。

